「技術を見つめて」— 山形県技術士会創立20周年記念誌 —

目　　次

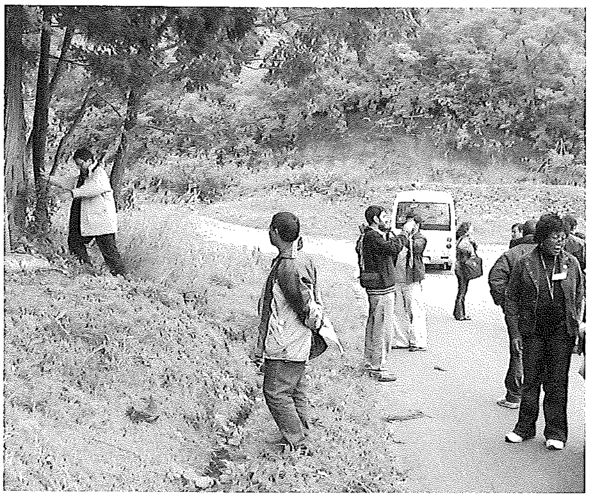
ごあいさつ ……………………… 山形県技術士会会長 本田康夫 ……… 1
祝辞
　山形県技術士会創立20周年を祝して 山形県知事 齋藤　弘 ……… 2
　山形県技術士会20周年に寄せて ㈳日本技術士会東北支部支部長 吉川謙造 ……… 3
　創立20周年に寄せて ㈳山形県建設産業団体連合会会長 升川　修 ……… 4
　山形県技術士会への期待 ㈳日本技術士会副会長 永田一良 ……… 5
記念論文
　「山形の経営者と公益」— 庄内地域を中心に —
　東北公益文科大学学長 小松隆二 ……… 7
特別寄稿
　「技術士会発足20年と内患外憂」 山形県技術士会前会長 土生㐂平 ……… 13
山形県技術士会の生い立ちと20年の歩み ……………………… 17
会員寄稿
　食料の課題 ……………………… 安彦宏人 ……… 53
　舗装体冷却技術に関する研究 ……………………… 有地裕之 ……… 55
　やまがた県づくり事業 ……………………… 石井知征 ……… 57
　私の技術体験50年 ……………………… 井上憲治 ……… 59
　新たな課題への挑戦 ……………………… 江平英雄 ……… 61
　緑風爛漫さくらの丘長岡山 ……………………… 上村裕司 ……… 63
　日本一環境リスクの少ない山形県を目指そう ……………………… 河合直樹 ……… 65
　地球環境と水力発電 ……………………… 江目一男 ……… 67
　古城長谷堂城を訪ねて ……………………… 寒河江　敬 ……… 69
　県産業と農業動態からの提言 ……………………… 鈴木多賀 ……… 71
　温故知新 ……………………… 須藤勇一 ……… 73
　技術と芸術 ……………………… 樽石良一 ……… 75
　倫理の実践 ……………………… 豊島良一 ……… 77
　排水問題の今日的な課題 ……………………… 成瀬　静 ……… 79
　情熱の技術士たれ ……………………… 藤田良悦 ……… 81
　自然と土砂災害防止 ……………………… 舟山昭浩 ……… 83
　地質調査と地質図 ……………………… 本田康夫 ……… 85
　ABOUT 5.10.20 ……………………… 松本喜一 ……… 87
　環境と水への思い ……………………… 丸山　修 ……… 89
　草木塔の不思議　草木塔と山頭火 ……………………… 三森和裕 ……… 91
　知るよろこび活かすしあわせ ……………………… 湯澤洋一郎 ……… 93
編集後記 ……………………… 95
会員名簿 ……………………… 97
ご協力ありがとうございました（協賛企業広告） ……………………… 121

草木塔の不思議
草木塔と山頭火

三　森　和　裕※

プロフィール

昭和53年　千葉大学園芸学部　卒
　　　　　造園・公園緑地計画設計に従事
主な設計　県民の森、源流の森、眺海の森、
　　　　　健康の杜公園、悠創の丘、県立
　　　　　自然博物園など



平成18年10月。JICA主催で訪れた世界10カ国の方々。草木塔を見て森とその背後にある感謝と畏敬を感じていた。

1　山頭火の句集と放浪記

草木塔ブームである。山形県置賜地方に集中する草木塔はどうしてなのか、いろんな説があるが、明確には解明されていない。そして山頭火ブームでもある。俳人種田山頭火の句集に「草木塔」がある。この句集は昭和15年４月に一代句集として刊行された。これは、第１句集鉢の子（昭和７年６月20日）、第二句集草木塔（昭和８年11月28日）、第三句集山行水行（昭和10年２月28日）、第四句集雑草風景（昭和11年２月21日）、第五句集昭和12年８月５日、第六句集孤寒（昭和14年１月14日）、第七句集鴉（昭和15年７月15日）を総括して出版したものである。第二句集でのタイトル草木塔が総括の本のタイトルにもなったものであるから、かなり意識的に扱われた言葉であることは間違いがない。山頭火と草木塔は切っても切れない関係のものである。

山頭火の「草木塔」と置賜の「草木塔」とはどんな関係があるのか調べてみたくなった。

山頭火が東北を訪れたのは、昭和11年。６月に甲州から信濃路へ入り、新潟の良寛遺跡を巡りながら、山形、仙台を経て平泉へ行っている。７月に日本海側を福井まで戻り永平寺へ参籠したとある。特に鶴岡では俳人和田光利（あきとし）の接遇を得て、だいぶ楽しく句会を行ったりしていたが、風呂に行くと言いながら突然行方不明になり、法衣も着ずに、浴衣ひとつで仙台まで行ってしまった。そのことは山頭火が、仙台からハガキを光利に出してわかったのだという。

2　草木塔の言葉はどこで

山形県米沢市を中心とした地域にのみ草木塔が存在するとわかったのは、昭和29年の佐藤忠蔵氏が羽陽文化23号に発表されてからである。山頭火の句集からは21年もあとのことであった。草木塔の出版は昭和８年、東北の旅は昭和11年である。山頭火は草木塔という言葉を、東北に来る前にはわかっていたことになる。山頭火は村上で、草木塔のことを知ったという、郷土史家もいるが、時間的なずれがある。誰に聞き、何を感じ句集にしたのだろうか。どうして山頭火は、草木塔という言葉に固執したのだろうか。また、草木塔とう言葉は、あったのだろうか。

3　辞典にない草木塔

まず、草木塔という単語がいつの時代から認識されたのかを辞典をもとに調べてみた。昭和８年以前に出版されている書籍には草木塔の言葉がない。

書　名	出版年など	
①大日本国語辞典　金港堂書籍	第三巻：上田萬年・松井簡治、	大正６年初版
②廣辭林　三省堂	新訂版：大正14年９月20日 初　版：昭和16年１月18日 709 版：昭和24年11月	

③大辞林：平凡社	昭和10年12月14日： 昭和15年４月15日： 下中弥　三　郎
④新式辞典：大倉書店	大正元年： 大正９年： 芳　賀　矢　一
⑤新辞典：至文堂	昭和４年４月15日： 古　寺　林　作
⑥広辞苑：岩波書店	1955年　初版： 1998年　第８刷

これらの辞典のどれにも草木塔の項目はない。ではいつからこの言葉が出現したのか。さらに現代の辞典も調べてみたが、驚いたことにすべてにおいて、草木塔の記載はないのである。

書　　名	出 版 年 な ど
①日本国語大辞典 小学館	昭和49年11月１日
②日本語大辞典： 講談社	1989年11月６日
③大辞泉： 小学館	1995年10月１日
④世界大百科事典： 平凡社	1988年４月28日
⑤広辞林： 三省堂	第６版：1994年11月１日
⑥学研国語大辞典： 学習研究社	1980年11月10日
⑦ブリタニカ国際大百科事典	
⑧世界大百科事典： 平凡社	1974年１月１日
⑨原色現代百科事典： 学研	1868年12月１日

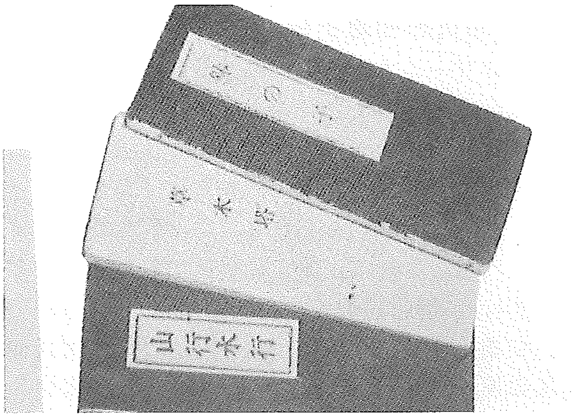
他にも現代用語の基礎知識、イミダス、智恵蔵などにも見当たらなかった。

これらの中で、草木塔の項目があったのは、昭和58年に刊行された　郷土事典山形県大百科事典（山形放送）ただ一つである。全国の事典、辞典にも草木塔の項目を追加してもらう必要がある。

４　句集の題名の由来

さらに全集などを紐解き、草木塔の由来を調べてみたが、第１集鉢の子については、恩師井泉水の意向もあって鉢の子となり、柿の葉では、山頭火と友人緑平の裏表の関係を述べている。しかし草木塔に関しては、全集の解説において以上の六句集（実際、鴉は草木塔には入っていない。）を総括して出版する時、大山澄太は書いている。「二人で題名を相談した。山頭火は雑草風景も好きらしかった。だが、結局草木塔とした。草木塔は山頭火塔でもある。」と。

この草木塔の扉のページには、若こうして、死をいそぎたまへる母上の墓前に本書を供えまつる。と記し最期の場所一草庵にも母の位牌を大切におまつりしていたという。母のことを深く愛していたことがわかる。ここで跋文を大山澄太氏が結んでいる。文は「翁は永遠の旅人である。自然に帰依し草木を友とする旅人である。この600句こそは翁が無心に積み上げた寂しき光の草木の塔である。」このように、大山氏は草木と一体となって行乞を行ってきた山頭火の心の積み重ねを塔と表現したようである。そこには、置賜の草木塔との関連はなかったのではなく、偶然にも山川草木悉皆成仏という仏教思想が一致したものだと理解するのである。



山頭火の句集。草木塔は縦15cm、横６cmほどの経本仕立てのもので、印刷の文字も12ポイントで山頭火の意向がかなり強く働いている。